

県中教研 英語部会だより

第 33 号

発行日 平成30年3月
発行所 富山市千歳町1-5-1
富山県中学校教育研究会
編集責任者 南島 啓
題 字 金山 泰仁 先生

「補助輪をはずしてみませんか。」

指導主事 豊原 正貴

学習指導要領改訂に当たり、平成29年7月に中学校学習指導要領解説が公開されました。外国語科では、「話すこと（やりとり）」の領域が新設され、即興で情報を交換したり、互いの考えや気持ち等を伝え合ったりする力を身に付けさせることが求められます。

本年度、研究大会等で、生徒が英語で対話する活動を参観する機会に恵まれました。生徒が相手と目を合わせ、既習の英語を駆使しながら話す姿から、自分の考えを相手に伝えたいという思いが伝わってきました。一方、互いにワークシートにある英文をただ読み上げている授業もみられました。「即興で伝え合う」活動とはどのようなものなのでしょうか。

学習指導要領解説には「話すための原稿を事前に用意してその内容を覚えたり、話せるように練習したりするなどの準備時間を取ることなく、不適切な間を置かずには相手と事実や意見、気持ちなどを伝え合うこと」とあります。私自身の授業を振り返ってみると、事前に原稿を書かせてから話させたり、ペアでスキット原稿をつくりそれを覚えさせた上で発表させたりしていました。まるで自転車で転ばないように補助輪をつけたまま練習させているような、そんな授業でした。

補助輪を付けたままでは、いつまでたっても自転車で乗れるようにはなりません。転びながら何度も何度も繰り返し練習することで、短い距離からだんだん長い距離を乗れるようになります。慣れてくると補助輪なしの方が自由に乗りこなすことができる実感するでしょう。

即興的な対話を目指し、思い切って補助輪をはずしてみませんか。最初はたった1文のやりとりかもしれません。でもそれは、生徒にとってきっと大きな一歩となることでしょう。

(西部教育事務所)

来る2018年度に向けて

部長 南島 啓

2017年3月、新学習指導要領が告示されました。年号が変わることが確実なので西暦で書きますが、中学校は21年度、小学校は20年度に完全実施されます。今回の改訂は私たち英語科教員にとって他教科とは比較にならない変化をもたらします。以下に18年度中に押さえておくべきことをまとめてみます。

1. 校区内小学校との情報交換

来年度から小学3年生以上に、新学習指導要領の内容を取り入れた年15時間の授業が加わります。これは移行措置として必ず実施されますが、各小学校の判断で更なる授業時数を先行実施として加えることも可能です。中学校は19年度から、英語の文字を識別し、書き、読むことができる新1年生を迎えることとなりますが、どこまでの能力が身に付いているかは出身小学校によって違う可能性があるのです。私たちは18年度中に校区内の小学校と情報交換し、先行実施の有無や移行措置でどの内容を学ぶのかを把握しておく必要があります。また、これからは中教研学力調査に小学校で学んだ表現や単語が既習事項として含まれていく可能性も考えられます。いずれにせよ、小学校高学年で使用される新教材「We Can!」を熟読しておかなければなりません。

2. 英語使用場面を想定した授業改善

新学習指導要領では「話すこと」が「やり取り」と「発表」に分かれて5領域になり、授業は英語で行うことを基本とするという文言が入るなど、英語を使用する場面を想定した授業改善が求められます。実際、10月の研究大会を見ると、生徒や教師の英語使用量が大幅に増えたなど感じます。生徒が「英語を使って何ができるようになるか」、そのために教師は「何をすべきか」、私たち英語科教員の意識改革が求められる18年度になるのではないのでしょうか。

(富・西部中)

第61回研究大会報告

■新川地区

新川地区大会では、黒部市立鷹施中学校を会場に、村田真教諭による1年生の研究授業が行われた。三単現のsを用いて、鷹施中学校の先生方のことをより詳しく知ることを目標に授業が展開された。まず身近な担任の先生を題材としたクイズを行い、楽しく自然に音声から三単現のsを導入した。耳から入り、口頭で練習し、IT機器を用いて視覚で確認するといった段階を踏むことで、生徒の理解が深まっていった。IT機器を用いることで、生徒の視線が自然と上がり、身近な担任の先生を題材に用いたことで、生徒たちが自然と聞きたくなる場面設定がなされており、生徒たちが意欲的に活動に参加していた。その後の活動では、鷹施中の先生の紹介文を聞き取り、ペアやグループで尋ね合い、紹介された先生方について、より詳しく知ることができた。先生方の情報が書かれたカードを見て、即興で会話をしており、新学習指導要領で求められている即興で表現する力の育成にもつながる活動であった。

部会協議①では、授業の視点に照らし合わせ、研究授業でのよい点や疑問点について話し合い、意見交換が行われた。東部教育事務所の團千加子指導主事より、「生徒が英語を使ってみたくなる状況」「場面設定」の大切さについてご助言をいただいた。部会協議②では魚津市立西部中学校の近藤沙織教諭、魚津市立東部中学校の長田真夏教諭より、「CAN-DOリストの効果的な活用はどうあればよいか」をテーマに、CAN-DOリストを用いて学習到達目標を設定することの効果について魚津市での具体的な実践例が紹介された。どの言語材料を用いてどのような言語活動を行うことが大切なのかが再確認された。



大澤 健史 (中・上市中)

■富山地区

富山地区大会では、富山市立藤ノ木中学校を会場に、水口奈津樹教諭による1年生の授業、四角目美花教諭による2年生の授業、そして高橋由希恵教諭とALTアロスト先生による3年生のチームティーチングの授業が提案された。

1年生での「グループで人物を当てるクイズ大会」では、教え合いの場面も見られ、生徒たちは間違いを気にせず、何度もクイズを出し合っていた。その後の発表にも意欲的に取り組んでいた。2年生では、ALTに薦める場所の紹介文をよりよいものにするために、スピーチ発表とその後の英語でのやりとりに挑戦した。先輩である3年生のスピーチのVTR視聴後に、グループ活動を行うことで、その後、学級全体の前で進んで発表したり、原稿を見ずに発表したりする生徒が増えていた。3年生では、電話の応対に取り組んだ。ペアやグループでの学びや助け合いの中で、生徒たちは、状況カードを用いて、聞き返したり質問したりと即興的な電話の応対に挑戦していた。ALTの即興の質問も効果的だった。どの学年も、「話すこと」に焦点を当てたスモールステップの授業であり、身に付けさせたい力が明確であった。温かい雰囲気の中で、英語を話したくなるような教師の手だてが工夫された展開であった。

指導主事の先生方からは、「CAN-DOリストの学校全体での取組」「4技能を単元ごとに焦点化し、総合的に育成すること」「授業をコミュニケーション実践の場とすること」「スピーキングテスト等の有効活用」等、貴重な助言をいただき、今後の指導改善に向けて、得ることの多い研修会となった。

部会協議②では、平木裕文部科学省初等中等教育局視学官より、新学習指導要領改訂のポイントとして「英語を使い込み」「その場で考え」「実際にあり得る場面設定で」が今後の改善の方向性であると分かりやすくお話していただいた。

坂口美也子 (富・大沢野中)

【研究主題】 コミュニケーション能力の基礎を養うにはどのように指導したらよいか
— 4技能を総合的に育成するための言語活動を通して —

■高岡地区

高岡市立福岡中学校を会場に高岡地区大会が行われた。田賀也功志教諭による1年生の授業では、教科書本文を使い、内容を的確に理解するために行間を読み取ったり、登場人物になりきって音読したりした。スモールステップの手立てを踏んだテンポのよい授業が展開され、生徒たちは生き生きと活動していた。場面を示したイラストを掲示するなどの工夫が多く見られ、生徒は臨場感をもって音読することができた。松村絵里香教諭とALTコーリー・カランジュラ先生による3年生の授業では、ALTに高岡の名所や伝統行事を紹介する手がかりを見付けるために、グループで発表したり、ALTから質問を受けたりする活動が展開された。帯学習でカルタを用いて後置修飾の復習をしたり、きめ細かなワークシートを準備したりすることで、苦手な生徒でも意欲的に授業に参加することができた。

部会協議①では、それぞれの授業について、付箋を用いて、授業のよかった点や工夫が見られた点、改善点等を話し合った。視点をしばったことで協議内容が深まり、授業力向上のための充実した話合いとなった。東部教育事務所の團千加子指導主事、西部教育事務所の窪田俊介指導主事からは「相手意識を大切にすること」「ゴールを明確にすること」「教科書本文を活用した言語活動の工夫」「CAN-DOリストの活用」等、今後の授業改善に必要なたくさんのご指導をいただき、大変有意義な研修となった。

部会協議②では、平木裕文部科学省初等中等教育局視学官より「中学校の新教育課程が目指すもの」をテーマに、学習指導要領改訂の趣旨や指導者に求められる英語力等についてご指導いただいた。

小清水育代（氷・西部中）

■砺波地区

砺波地区大会では、小矢部市立大谷中学校を会場として、中島裕子教諭とALTサーシャゲイ・スマート先生による1年生の研究授業が行われた。

「英語でやりとりをして、有名人を当てよう!」という学習課題のもと、JTEとALTの対話を聞いて内容を確認したり、speak, like, playを用いてQ&Aのパターンプラクティスをしたりする活動から始まった。クイズの答えとなる有名人は8名おり、どの生徒も真剣かつ楽しそうにクイズを出題したり、聞き取ったりする姿が見られた。

部会協議①では、研究授業について付箋を用いてグループ協議を行った。その後、西部教育事務所の豊原正貴指導主事から、①メモを見ながら即興的にやりとりする力をつけること②やりとりする必然性・必要性を意識し、生徒が活動するときのワクワク感を大切に指導すること③単元計画を立てる際に、CAN-DOリストとの関連を吟味し、中心に扱う領域を明確にしておくことの3点の助言をいただいた。

部会協議②では、「小中連携を念頭に置いた『聞くこと』『話すこと』に焦点を当てた言語活動はどうあればよいか」という協議題で、南砺市立城端中学校の中山治美教諭が南砺市の実践について発表した。小中連携を意識した小学校への乗り入れ授業の実践事例や、中学校1年生「自己紹介」での実践事例が紹介された。豊原指導主事からは、①小中連携では中学校からの働きかけが大切であること②小学校での実践に手を加えてつなげる実践が有効であることの2点の助言をいただいた。今後、授業改善をしていく上で、大変有意義な研修会となった。



松岡 香苗（南・井波中）

各地区の取組から

小矢部市中教研「夏期研修会」

第61回研究大会の研究授業の在り方について協議を行った。会場校が小矢部市であることから、市内の英語教員の全員が、「自分が授業を行うとしたら」という視点に立って、共に考える場とした。

授業者の意図を受けて、コミュニケーション活動のポイントとして、次の事柄が挙げられた。

- ① 小学校の外国語活動で慣れ親しんだ、話すこと、聞くことを生かしながら、中学校では継続した言語活動で、理解と定着を図るようにする。
- ② 生徒の興味に沿っていて、即興性があり、しかも必然性のあるやりとりの場を設定する。
- ③ CAN-DOリストとの関連を明確にする。

また、実際のコミュニケーション活動をシミュレーションして改善を図るなど、授業のイメージを共有しながら、活発な意見交換が行われた。このような協議を行った結果、研究大会に向けての学びが深まり、日頃の授業に生かすことができる有意義な研修会になったと思われる。 北野 純子（小・蟹谷中）

射水市中教研「本年度の取組から」

射水市英語部会では、「コミュニケーション能力の基礎を養うにはどのように指導したらよいか～4技能を総合的に育成するための言語活動を通して～」を研究主題に掲げ、①使用場面の設定、②言語活動の工夫、③学習への意欲を高め、理解が深まるような板書、課題提示、発問、モデルの演示、終末の振り返り等の工夫、④教育機器等のICTを有効に活用することに重点を置き、4技能を総合的に育成するための言語活動の工夫について研究を進めている。

4技能を総合的に育成するための指導法について、富山高等専門学校 楽山進准教授を講師として招聘し、講演会を実施した。①新学習指導要領、②4技能の総合的な育成を図る言語活動の2点を中心に、ワークショップを取り入れて分かりやすく教えていただいた。

また、射水市立小杉中の鈴木智子教諭による1年生の研究授業を実施した。自分が知らないものについて尋ねることができる（話すこと[やりとり]）、ものの性質や状態について話すことができる（話すこと[やりとり][発表]）をねらいとし、「What's your favorite...?」を用いて、相手のお気に入りのものを尋ねたり、形容詞を用いて理由を説明したりする授業であった。インタビュー活動後、その結果をグループごとに集計し、代表者が前に出て結果を発表した。1つの授業の中で、新学習指導要領の話すこと[やりとり]と、話すこと[発表]の2つの領域を組み合わせた、提案性のある授業であった。

言語活動を充実させるためには、①「英語で何ができるようになるのか」を教師自身が明確にし、生徒にゴールイメージをもたせることが大切であること、②日頃から、繰り返し使うことで、基礎・基本の定着を図り、その上で技能を統合的に組み合わせた指導を重ねていくことが重要であること、③ICTの効果的な活用は、生徒の理解を助けることに有効であることが解明された。今後は、生徒が見通しをもって学習に取り組むために、どのような「課題の提示」をすればよいのかについて研究を深めたい。また、射水市小教研とも連携しながら、小中の教員での意見交換を積極的に行っていきたい。

関原 賢秀（射・新湊南部中）

高岡市中教研「研究授業を通して」

高岡市英語部会では、「コミュニケーション能力の基礎を養うにはどのように指導したらよいか」という研究主題のもと、基礎・基本の定着を図るための指導と評価の工夫や実際の使用場面を意識した言語活動の指導の工夫について研究を進めている。

市の研究大会では、視点を明確にして授業を参観し、協議会を行う形式を取り入れている。9月には高岡市立高岡西部中学校を会場に、佐々木友紀教諭とALTジョン・コンテ先生による1年生の授業が行われた。「西中の先生の意外な情報を得て、紹介しよう」という学習課題を設定し、やりとりを通して得た情報を活用して発表する活動となっており、技能統合型の言語使用を目指した授業であった。教師によるモデルの提示、複数のペアによる対話、全体発表というスモールステップが踏まれた授業展開であり、課題解決に向けて生徒が興味・関心をもって活動に取り組んでいたのが印象的であった。「授業の展開は適切であったか」、「発問・指示は適切であったか」、「本時に行われた活動はねらいを達成するうえで効果的であったか」の3つの視点で、部員は授業を参観し、授業後にグループ協議を行った。このことにより、協議内容が明確になり、主体的に話し合いが行われ、ねらいに迫った深い協議となった。

西部教育事務所の窪田俊介指導主事からは、「Q&A活動を発展させ、相づちやリアクションワードを付け加えて、より実践的なコミュニケーションとすることが必要であること」、「アウトプットのためには十分なインプットが不可欠であり、本時の目標が達成されるよう見通しをもって全体計画の中で語彙や表現力を積み上げていくこと」等が大切であるとの助言をいただいた。今後の授業改善に向けて、大変有意義な研修となった。

宮城 渉（高・南星中）